

ゼミの発話におけるあいづちが出る前の表現について いいさし表現を中心に

S02 (漢字表記) 学籍番号

要約

近年、日本に留学する留学生が増加するにつれて、日本の大学の特徴であるゼミに参加する留学生も多くなっている。しかし、日本の話し方に慣れていない留学生にとっては、ゼミのやり方、特に会話の進め方がかなり難しい。本文は、2015年9月に、神奈川県三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの40分程度の談話二つを文字化したものを資料にし、発話途中に挿入されるあいづちの直前に語り手が使う表現を分類し、定量的に分析を行う。その結果、発話途中に挿入されるあいづちの直前に、語り手がいいさししてあいづちを求める傾向があるということが分かった。また、語り手が発話する時、助詞を使うによっていいさしする傾向があるということもわかった。本文は、あいづちが出る前のいいさし表現を中心に分析を行う。

キーワード： いいさし、あいづち

1. はじめに

この論文は、大学院のゼミの談話におけるいいさしについて、発話途中に挿入されるあいづちの前に出るいいさしに限っており、語り手がいいさしして相手の反応を求める傾向を示していることを分析して研究を進める。

ゼミは日本の大学と大学院の重要な研究活動である。身近の大学を見、ゼミに参加する留学生がたくさんいると強く感じられる。しかし、日本の学生にとってはごく自然であるゼミのやり方は、留学生にとっては簡単なことではない。ゼミで自然発話を進められるために、相手と交流するが重要である。「二人の会話」になるために、「あいづち」というのは大事である。しかし、あいづちをすることにもタイミングがある。語り手が相手の反応を求めるためにどのような表現を使うのかを明らかにし、語り手がどのように相手の反応を求めたらいいのか、また聞き手がどのようなタイミングにあいづちをしたらいいのかという指導になる。

そのため、本文はゼミの文字化資料の中に、発話途中に出てくるあいづちの直前に語り手の表現を統計し、分類し、その中のいいさし表現を分析して研究を進める。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

今までの研究は、あいづちは自然談話を促すことを明らかにした。嶺川(2000)¹に、ブレイクタウン²の修復にとって「ハイ」と「エエ」などのあいづ

¹ 嶺川由季 『大学院のゼミの談話におけるコミュニケーション・ブレイクタウンの修復について—「対話」と「共話」の視点から—』 広島大学大学院国際協力研究科『国際協力研究誌』第6巻第1号, 2000

ちはあまり役に立たないと述べられているが、あいづちが会話の成立にとって代わりのない重要な役割を担っていることを明確に認められている。また、村田 (2000)³はあいづちが『「聞いている」という信号,感情・態度の表示,そして turn-taking に至るまで』と指摘している。あいづちの機能だけではなく、その分類、使われる頻度、場合、対象などについての研究も非常に多い。例えば、中島(2011)⁴に、『女性の言葉・職場編』(1997)に収録された談話資料を使用し、場面、世代、性別関係、年齢関係、親疎関係などの場面の差も含め、「ハイ」と「ウン」の使われる頻度、対象などの使い分けを詳しく論じている。あいづち自身だけではなく、あいづちと談話の内容の関係性についての研究もある。例を挙げると、土井ら(2000)⁵は対話の中に、あいづちと直前に相手の「ね」の使う頻度から、関連性を分析している。あいづちの研究を見ると、対話を対象にする研究がほとんどである。

土井ら(2000)⁶のようにあいづちと他の会話の要素との関連性を研究する論文が少なくないが、いずれも両方の参加度がほぼ同じである会話を対象としている。いわゆる、Aは一つや二つのセンテンスを言い、Bも一つや二つのセンテンスを言う。二人は何度もこのように交替で話すということである。

しかし、ゼミの場合では、そこに問題が出てくる。ゼミでは、一人が長く話し続ける場合が多く、発話途中にあいづちがもちろんよく挿入されている。その場合では、何人かも会話に参加しているが、参加度がずいぶん違っている。話しの量から見るのも、他の方面から見るのも、語り手は明らかに談話の主導者になっている。詳しく言うと、語り手は発話を短く切ったり、「いいさし」の形で終わらせたりし、あいづちを求め他の人が自分の話しを聞いているのを確認しつつあり、自分の言うことを中心として進め、談話主導者になる。

そのために、ゼミの場合が普通の日常的な会話とかなり違っている。主導者がいるため、ゼミでは談話を自然にするのは普通より遠く難しいのではないだろうか。このことは、元々ゼミのやり方がよく知らない留学生にとってはより難しい。しかし、積極的にゼミに参加し、聞き手として、語り手が何かの表現を使い、反応を求めていることを見つけ、あいづちをし、また語り手場として、何かの表現を使って積極的に相手の反応を求めるのがわかれば、合格のゼミ参加者になれるのであろう。

そのため、この論文の目的は、留学生がゼミによりよく参加できるように、ゼミの発話中で、発話に挿入されるあいづちの前に語り手がどのような表現を使うのかを明らかにし、その中のいいさし表現について具体的に分析しようとする。

3、研究の資料と分析の方法

年, pp. 105-117

² ブレイクダウンというのは、意見が違う、もしくは一方が話し続きにくいことを言うなどのことによって、会話がうまく進められないということである。

³ 村田 晶子 『学習者のあいづちの機能分析』 世界の日本語教育. 日本語教育論集 10, 241-260, 2000-06-30

⁴ 中島悦子 (2011) 「第3部 自然談話のあいづち」 pp. 144~158

⁵ 土井晃一、大森晃 『あいづちを統制したコミュニケーションにおける助詞ねの頻度の変化』 Cognitive Studies, 7(1), 107-111. (March, 2000)

⁶ 同5

(1) 研究の資料

研究の資料は、2015年9月に、神奈川県三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの40分程度の談話二つを文字化したものaとbである。

aは、「議論の流れの中で、学習者に絵本の効果を確認するのに、なぜ日本語学習者だけでなく、韓国語学習者も対象にするのか。また、絵本多読に向いている本を調べるのに、なぜ日本語学者でなく、日本語教師を対象にするのが問題となる」⁷についての討論の文字化資料である。

もう一つのbは、ゼミで発言内容が終わった後、発表者の「因子分析」の結果と方法についての質問と応答の文字化資料である。

(2) 分析方法

今回行った分析は、以上の二つの資料の中に、発話途中に挿入されるあいづち⁸を見つけ、計数し、その直前に語り手がどのような表現を使うのかを全部記録して分類する。分類した後の各々の比率を計算してその結果からあいづちといいさし表現との関連性を明らかにしようとする。分類の方法は、表1のとおりになる。

表1 分類の方法

| | 分類 |
|------|-------------------|
| いいさし | (1) ～が・も・を |
| | (2) ～とか～とか・と |
| | (3) ～で・に |
| | (4) ～て (で) |
| | (5) けど・が・けれども |
| | (6) ～ので・から |
| | (7) ～の・ような・って・という |
| | (8) ～か・～かなあ |
| | (9) ほか |
| いいきり | ～たい・～思う・～だろう |
| | ほか |
| ためら | あの・その |

4、分析の結果

1) いいさし表現の使う傾向

統計した結果は以下の表2にまとめている。

表2 統計した結果

| | 分類 | 数 | 比率 |
|--|----|---|----|
|--|----|---|----|

⁷ 2回目の授業で渡してくれた文字化資料である

⁸ 言葉だけであり、視線や表情などの身体言語はあいづちの中に入っていない

| | | a | b | 合計 | |
|--------|-------------------|------------|------------|------------|---------------|
| いいさし表現 | (1) ～が・も・を | 8 | 9 | 17 | 7.98 % |
| | (2) ～とか～とか・と | 5 | 5 | 10 | 4.69 % |
| | (3) ～で・に | 6 | 9 | 15 | 7.04 % |
| | (4) ～て (で) | 3 | 10 | 13 | 6.10 % |
| | (5) けど・が・けれども | 18 | 10 | 28 | 13.15% |
| | (6) ～ので・から | 4 | 8 | 12 | 5.63 % |
| | (7) ～の・ような・って・という | 12 | 8 | 20 | 9.39 % |
| | (8) ～か・～かなあ | 6 | 6 | 12 | 5.63 % |
| | (9) ほか | 19 | 20 | 39 | 18.31% |
| | 合計 | 81 | 85 | 166 | 77.93% |
| 終止形 | (10) ～たい・～思う・～だろう | 17 | 18 | 35 | 16.43% |
| | (11) ほか | 2 | 3 | 5 | 2.35% |
| | 合計 | 19 | 21 | 40 | 18.78% |
| 躊躇い | あの・その | 5 | 2 | 7 | 3.29% |
| 合計 | | 105 | 108 | 213 | 1 |

いいさし表現の比率について、表3を作った。

表3 いいさし表現の比率

| | a | | b | | 合計 | |
|------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|
| | 数 | 比率 | 数 | 比率 | 数 | 比率 |
| いいさし | 81 | 77.14% | 85 | 78.70% | 166 | 77.93% |
| 合計 | 105 | | 108 | | 213 | |

データから、いいさし比率は、aは77.14%であり、bは78.70%であり、合計の比率は77.93%までも達しているということがわかる。一方、合計のデータから見ると、終止形は18.78%となり、躊躇い表現は3.29%しかない。いいさし表現は77.93%であり、いいさし以外の表現は22.07%であるということである。この結果から、語り手を相手にあいづちを求めるために使う表現の中には、いいさし表現が一番重要であり、役に立つ表現となっている。

2) 助詞が代表である

次に、いいさし表現だけを分析する。

いいさし表現の中に、数の多い順を表すために、表4を作った。

表4 いいさしの分類

| | 多い順 | 項目 | いいさし表現の中 | |
|------|-----|---------------|----------|--------|
| | | | 数 | 比率 |
| いいさし | 1 | (5) けど・が・けれども | 28 | 16.87% |
| | 2 | (7) ～の・ような・って | 20 | 12.05% |
| | 3 | (1) ～が・も・を | 17 | 10.24% |
| | 4 | (3) ～で・に | 15 | 9.04 % |
| | 5 | (4) ～て (で) | 13 | 7.83 % |
| | 6 | (8) ～か・～かなあ | 12 | 7.23 % |
| | | (6) ～ので・から | 12 | 7.23 % |

| | | | | |
|--|---|--------------|-----|--------|
| | 7 | (2) ~とか~とか・と | 10 | 6.02 % |
| | | <u>合計</u> | 127 | 76.51% |

いいさし表現の中には、(1)~(7)は全部助詞であり、いいさし表現の中の69.28%も達している。それだけではなくて、(9)ほかの表現の中にも分類しにくい助詞がたくさん入っているため、助詞の表現が実は69.28%を超える。以上の分析から、助詞を使うのは、いいさし表現の明確な傾向となっているということがわかる。

3) 具体例

資料 a の中に以下の会話がある：

(質問者 A): でもやっぱり学習だから、日本語が入っていないといけないという、その、原則はあるわけですか↑。

(発表者): あ、でも、あの1冊は日本語、文字なしの絵本っていうのも入ってるんですけど・・・(質問者A1:あー)・・・

これは、発表者は質問者 A の質問に答える場面である。この場面では、発表者は「ですけど」のいいさし表現を使い、まず相手の言ったことが確かにそうであると認め、それに「今から本番の答えだよ、よく聞いて」というような意味もあるのではないか。

資料 b に以下の部分がある：

先生 B: それから二つ目は、あの一、えっと一、ちょっと待ってくださいね。えっと一、二つ目はその、これから、なん、どんな調査をするということで、つまりその、これで、あの、因子分析をしたからといって、なにかすべてが明らかになるわけではないと (発表者 B: はい)。

この場合では先生は「なるわけではないと」でお終いの、「私はそう思うが、あなたはどう思う」という意味で、「なるわけではないと思う」より相手に注目される。もちろん、相手の反応を求めるという意図も含めている。

4) まとめ

以上の分析をまとめれば、発話途中に挿入されるあいづちの直前に語り手がいいさしすることがよくある。また、語り手が発話する時、助詞を使うによっていいさしする傾向を示している。

あいづちを使うことにもタイミングというものが存在している。勝手にあいづちを使い、語り手の話しを切るのではなく、語り手のあいづちを求めている表現を見出し、適切なタイミングにあいづちを使うのは、ゼミをうまく進ませることにとっては非常に重要である。この調査の結果によって、留学生がゼミに参加し、発話者の発話を聞いている時に、内容のほうは言うまでもなく、発

話者の助詞をなどいいさし表現を意識しながら聞くのは、よりよくゼミに参加することに役に立つのではないだろうか。

考察

本文では、発話の途中に挿入されるあいづちの直前に、語り手は助詞が主なるいいさし表現を使い、相手の反応を求める傾向があるということを明らかにした。また、語り手が使ういいさし表現の中に、助詞の使うのは主なるということもわかった。

しかし、今回の分析には二つ問題がある。

一つ目は、分類する時、分類しにくい表現もたくさんあり、本文は最後までも分類できなかった表現を「ほか」に分けたが、それは結果に影響を与える恐れがあるのである。また、資料は2つしかないので、個人的な癖が結果に影響している可能性もあり、今後の研究には、資料の量を増やすことにする。

二つ目は、分析の資料は文字化資料であり、語り手がいいさしし、相手の反応を求める時に、語調などの変化があるのかがわからないのである。いわゆる、相手の反応を求める機能を果たしたのはいいさし表現なのか、それとも語調の変化なのかということが問題となっている。

また、分類する時に、もう一つ面白いことに気づいた。あいづちが出る前に語り手が使う終止形の中に、「～たい、～思う、～だろう」などの自分の意志や意見などを表す表現は 87.5%も達しており、それを今後の課題にしようと思う。

参考文献：

嶺川由季 『大学院のゼミの談話におけるコミュニケーション・ブレイクダウンの修復について—「対話」と「共話」の視点から—』 広島大学大学院国際協力研究科『国際協力研究誌』第6巻第1号, 2000年, pp. 105-117

村田 晶子 『学習者のあいづちの機能分析』 世界の日本語教育. 日本語教育論集 10, 241-260, 2000-06-30

中島悦子 (2011) 「第3部 自然談話のあいづち」 pp.144-158

土井晃一、大森晃 『あいづちを統制したコミュニケーションにおける助詞ねの頻度の変化』 Cognitive Studies, 7(1), 107-111. (March, 2000)